

研究だより

青森市沖館 青森営林局構内
農林省林業試験場青森支場 (電話青森6876番)

編集 野村 武 松

ヒバ天然林施業法講習會所感

支場 吉田 藤一郎

御承知の如く先般10月25日から3日間、田名部営林署管内恐山湖畔国有林で、「森林構成群を基礎とするヒバ天然林の施業法の講習會」が行はれ青森県下の署長と局の部課長共他の方々が出席された。講師は日本林業技術協会理事長松川恭佐氏で、氏が本施業法の創始者であることは御承知のことである。

此の講習會の係として私も出席したので、その時に出た質疑や、私が談笑の間に聞いたこと、其の他について私の感じたことを、断片的に記述することにする。

先づ全体として感じたことは、出席者が非常に熱心眞剣であつたと云ふ点で、此れは出席者が森林の取扱に対して非常に関心をもち、その方法を研究しようとする意欲が強いことを示すもので大変心強く思つた。以前の様な上からの命令でやると云ふ御座り的なものでなかつたことは、誠に林業技術家としての自負と責任を強く持たれて居た結果で御同慶に堪えない。此のことは松川講師も實習の終りに述べられた如く、今度の講習會には経営部長始め経営部、事業部の課長が出席して實習を完遂されたが、この様なことは過去の此種の講習會に於てはなかつたことであつて、此の事も上述のことを裏書きしていることと思はれる。

以下 2.3のことを述べて見る。

(1) 群の識別分割についてであるが、群の存在と云ふか、群と云ふものが認められると云ふことは納得出来やすいことの様であるが、今度の實習の様に實習地の全部について群の区劃線を引くと云ふことは仲々難しい様であつた。松川講師も線を引くとなると仲々骨が折れると云つて居られた。どつちの群に入れたらいいだらうかと思はれる顯著でない木で迷ふと、そのために群が大きくなつたり小さくなつたりすると云ふ様なことなど

もあるから、各人の分割は一つ一つ取れば必ずしも一致しないものが出るのは已むを得ない様である。

(2) 伐採木の選定についてであるが、此の施業法を始めて聞かれた人の中には、一定の群には一定の伐採が規定される、と云ふ風なものであると思はれた人が居られた様である。例へば群について基準型があり、それに持つて行く施業法と云ふ様なことも考へられるであろう。欧州では此の様な考で、林木の構成を案出したのがデュエスベルグの三角形配置であり、林分の構成を案出したのが有名なワグネルの帶狀割伐林であるが、松川氏の施業法はそう云ふ式のものではなく、ビオレーの照査法に近いものである。参考のためビオレーの伐採についての考へ方を一寸引用しよう。「抑々林分は伐採によつて完成されてゆくものである。従つて伐採は単に収穫をあげるための仕事であるのみならず同時に、否何よりも森林取扱上根本的の施業たるべきである。即ち合理的の森林経営にあつては、収穫と後生樹の撫育とは結局同一の方策たることを意味する。林分には諸種のものがあり、更に同一林分の構成も雑多である以上伐採にもそれに相應して諸種の方法がある訳であるが、それは林木をして最大の生長をなさしめるような方法で行はなければならない。」

(3) 群はあつても伐採木は1本1本の木を觀察して決定するのであるから特に群を識別分割してやる必要がないではないかと云ふ意見を聞いた。この人は此の施業法には熟達してゐる人である。例へば間伐の場合でも一々この木は幹級区分の何に当るかと分類してから伐採木を選定すると云ふことを普通はやらないことと同じではないかと云ふのである。松川講師は伐採木選定の時は群単位にやつて行くが、其の方が能率も上がると云ふて居る。全体を總攬すると云ふ点からも確に群を単位にやると云ふことが合理的の様に思はれる。

更に群に関して特に述べたいことは、松川氏が講義の際に述べられたが、北海道では以前擇伐を行ふと枯木が沢山出来ると一般に云はれて居たが北海道の或る人が、松川講師の施業法のやり方を青森へ来て教はり、それを北海道でやつて見たら非常に好結果で枯木が出なかつたと云ふことである。私なぞは山官に成つた始めから此の施業法を教へられたので、擇伐と云ふものはこう云ふものだと思つて馴れて了つていたのであるが、これが白紙で擇伐をやると云ふことになると扱ひ所がないから大いに困難するに違いないと思はざるを得ないのである。群の価値を再認識した次第である。

研究だより

土壤水分とヤマハンノキ、イタチハギの根の分布について

好摩分場 千葉 春 美

根系の分布状態

先づイタチハギについて別図でみると、両区共第1層の0~5cmには少く第2層の5~10cmに最も多い。

敷藁区は10~30cm、次いで30~60cmと大きな段階をつけ減少し、深さ100cm迄伸長している。一方対照区は10~60cm迄は若干減少しているがそれ程の差がみられない、即ち広範に亘り略同量の根が分布されていることが判る。

次にヤマハンノキであるが、イタチハギと異り第1層に両区ともよく発達している。そして深さ20cm程度迄略同様の差で敷藁区が対照区よりよい発達を示している。20~60cm迄は若干の差であるが、その稍反対となつてゐる。

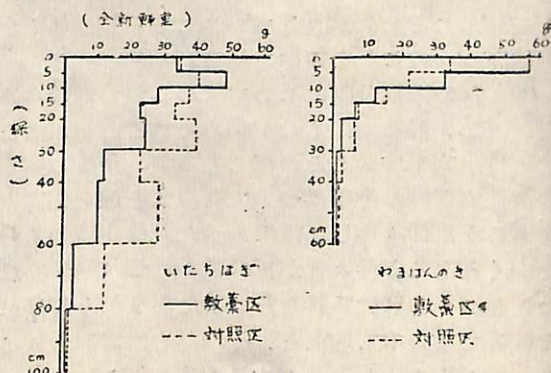
以上の結果から両樹共敷藁区の方が地表面により多く根が発達していることが伺はれる。

このことは従来の文献によつても明らかな如く根は有効水が存する土壤中によく発達するものと云はれており、本試験でも敷藁の乾燥時でも土壌表面迄有効水が保持され敷藁によつて蒸散が防止され根の発達が良好となつたものと考えられる。

以上の如く根の分布状態については、両樹共深さ10cmの個所では顕著な差が認められ敷藁区が対照区よりよい結果が得られた。

次に両樹の全新鮮根重についてみるとヤマハンノキで敷藁区がよくイタチハギでは逆に対照区がよい結果となつてゐる。尚地上部の生育状況は紙面の都合上省略するが新鮮根重と同様であつた。

このような結果からヤマハンノキは土壤水分が適当に保持されていた地帯、例えば沢沿いの個所等に特に生育がよくイタチハギは土地を選ばない適応力の異なる樹種と云へるものと考えられる。



本実験は肥料木に関する研究の一部として、根の特性について調査したものである。

即ち最近の砂防方面に又牧野改良にこれ等根瘤菌並放射状菌を有する肥料木が積極的に活用されつつある現状から、これ等植栽の基礎資料とする目的で実施したものである。

試験方法

苗畑に敷藁区と全然行はない対照区の各3ブロックを設け、1ブロック当り供試苗は4本とし4月20日定植し後床面より稍高目に水平に切断し萌芽せしめた。その時の苗の大きさはイタチハギ、ヤマハンノキ共に地際直径0.8cm、重量は前者が13g内外、後者が26g程度であつた。

両区共無施肥で敷藁区に1m²当り約3kgのかなりの量の藁を全面に敷いた。

このように同じ土壌で土壤水分を敷藁で人為的に変えた場合、根系の発達状況がどのように変化してくるか、即ち裸地であつた場合と落葉等が堆積して地面が覆はれている地帯等の根系の発達がどのように異ってくるものであろうかと云うような点に追求の重点を置いたものである。

このような処理で両区の生育期間中土壤水分(乾土重に対する%)と地温を測定したのであるが土壤水分は深さ0~3cmの個所では雨量の多い7月中旬から8月の始め頃迄はそれ程の差がみられなかつたが、その以後では3%内外の明らかな差がみられた。然し深さ20~23cmの個所では明確な差がみられない。

又地温では深さ10cmの個所で20°C内外対照区に比較して敷藁区が低い結果を示していた。

以上のような環境下に生育させたイタチハギ、ヤマハンノキの根系の分布状態を或る一定の深さ毎に11月に堀取りその新鮮根重について調査した結果が次の如くである。

男助山及矢倉山試験地の

スギについて

支 場 武 藤 惇

最近、林木育種、或は林業品種の問題が盛んに論ぜられて居り、殊にスギに付いて、本邦全般的に研究論文が沢山出ている。

1953年は雪石営林署部内の男助山試験地と、鯉ヶ沢営林署部内の矢倉山試験地が丁度定期調査に当り、両署を実地調査する機会が与へられたから実行上で感じた事などを雑然と御報告致したいと思う。

此の両者は、スギ天然林として、殊に秋田スギ分布地域の周縁部の内、矢倉山は其の北限地に当り、男助山は其の東端地に当り、夫々学術的に貴重な存在として種々研究論文が発表されて居ることは御承知の通りである。

男助山試験地の主体をなすスギは従来から鶯宿スギと呼ばれ、伏条性、或は立条性を有するものとされている。事実、横臥したスギの樹幹から萌芽したものが所々にみられる様である。樹冠は極めて鋭尖であり、樹高成長も良好である。亦枝条の梢頭部は上向に抽出し、中央部は少々水平になり、下枝は下垂して其の或るものは地表を匍匐して伏条木を成立して群状になつてゐる状態が相当多く見受けられる。其の他、樹皮の分類、針葉形態、球果の形状比、成育状況等、形態学的に鶯宿スギを特徴づける事が出来そうな氣もする。

元来、東南日本脊梁山脈地方の熊スギ、吉野地方の吉野スギ、それに秋田スギなどと称せられるものは夫々立派な地方的品種として取扱はれてゐる以上、秋田スギの系統を引く、鶯宿スギは其の部分品種として一般的な秋田スギと如何に異なるかを明かにしなければならぬ様に感ずる。佐藤博士は、スギに於ける伏条性、萌芽性の強弱は品種決定上の一生理学的特徴であると言はれている。

以前(昭和7年)試験地内の杉を母樹として挿木が行はれて居り、相当好成績を得ているが、之を更に優良個体の選抜に依る無性繁殖をはかつて居れば尙好結果が得られた筈である。

佐藤博士は試験地内にある一本の畸形木を突然変異であらうと言はれている。(樹幹が彎曲分岐して枝が多く、まるでタコヤイカを逆さにした様

な畸形木である)亦、博士は、ヒバの毬果の形態を、津軽下北産のものを北日本系とし、木曾産のものを南日本系とし、雪石産を中間型として分類されている。上述の如く育種的にも品種的にも男助山は、色々な資料の供給源となり得る様である。

一方鯉ヶ沢営林署部内の矢倉山試験地は日本海方面に於ける本邦天然スギ分布の北限地として海拔高200~300mの北面傾斜地に位置しており、スギの他、天然生ヒバが散生し、それにブナ、ミヅナラ、イタヤカヘデ等の広葉樹に依つて構成されている。本試験地はスギの北限である事自体が重要な価値を有しているものと思はれる。

試験地内には樹幹の通直な見事なスギもあるけれども、樹冠巾の広い暴れ木的なものも見られ、又稚幼樹群中には上木の針広大木に壓せられて矮小畸形木となつて居るものが、相当見られる。混入ヒバは樹幹の通直なものも若干見られるが、甚だしく曲りくねつて併も多く枝を出して居る畸形的な形をなしたものが多く見られる。佐藤博士は此等の樹形関係につき、局所的地形と気温差を問題にして居られるのであるが私は次の如く考える

樹形の通直なものゝ子孫は通直なものも多く出るのであらうことは常識的に考えられるが通直なものゝ子孫でも、其の子孫が成長する途中に於て被圧その他の影響を受ければ、通直となり得ない事は当然である。試験地内の樹形は地形、気温のみならず、環境の総和によつて現はさるべきものと考えるのが穩当な様である。中村博士が言われる通り、樹形は遺伝する様であるが生育環境に依つて左右される方が更に多いものと認められる。

亦一方、林縁に近い日光の当る場所には灌木が相当の勢で侵入しており、林内の鬱閉している処は、ヒバ稚樹の匍匐状態が多く見受けられる事など更新上の問題も考へなければならぬ。

その他、試験地の杉の樹皮については、網目型(左巻、並に右巻)、離皮型、垢膚型(右巻)が多いとされているなど、從來までに検討されたものだけでも多くの問題がある。

本場育種研究室の千葉技官によれば、矢倉山の杉種子は全国的林業用スギ種子の中で、滲透圧の数値が最大であり、此の事から、該地の杉は他のものに比して耐寒性が大であるにちがいないと推論して居られる様である。

優良地方品種が、その立地、環境その他多くのfactorのもとに、地方地方に育成されるならば、林木育種問題は自ら解決されそうな氣もする。

以上とりとめのない事ばかり書いて紙面を割いた事を御詫びしてペンを置く。

不良材地ニセアカシヤ (続, 完)

支場 木村 武松

前文で云つた処を要約して、土地の悪い処には普通三つの手段が考へられる。第一に、その土地に何等かの操作乃至工事を施して土壤の理化学性(延ては化学性)を改良する事、第二に肥料木の意義ある木を前植し、土地の条件をよくした上目的の樹を植栽し、又は目的の林に誘導する事、勿論混植と云う事も考えられる。第三には樹種の選擇で其土地に適し又は耐える木を導入する事である。

尙植栽する場合甚だしい砂質の処は浅植に過ぎると旱害をうけ易いので斯る処に限り寧ろ稍々深植の気味にする方が安全である。そして勿論強健な苗をえらび、植えた後乾燥を防ぐため根元をよく踏み、また枯草や軽く土などを根元によせかけておく。そして寧ろ密植にするがよい。

また時に二種類以上のものを混植せしめるがよく例えばカシワ、ハンノキ等、少くとも当分は深根性のものと、ニセアカシヤ・カバ・ヤマナラシ・ドロ・ヤナギ等の浅根性のものとを混ぜるとか、喬木類の中にハギ・イタチハギ等の灌木性のものを混ぜるとかすれば害虫其他の危害に対する抵抗力を増すし、土地の改良にも資し得る。

さて標題のニセアカシヤ類についてであるが、此の類は荳科に属し北米原産でその根瘤菌の作用により空中窒素を固定するので比較的瘠地にも育つ。故に林木の生育不良地や荒廢した採草地・放牧地等に混植したり前植したりすればその落葉が林地に腐植を還元し化学的養分の外土壤の保温・保湿性が増し、他方根の發育と活動により土壤の旧組織が破壊されその理化学性がよくなり、根系の生活環境が改善される。然も之等の混植の結果は一時的でなく持続性のある点に長所がある。

從來我国に比較的よく知られている此類に

- (1) ニセアカシヤ (*Robinia pseudacacia* L.)
ハリエンジュ、擬合歡
- (2) トゲナシニセアカシヤ (*R.p.* var. *umb-raculifera* DC. (*Acacia Parasol*)
パラソルアカシヤ、タマニセアカシヤ、英国トゲナシアカシヤ
- (3) 青島トゲナシアカシヤ (*R.p.* *bessoni-ana* Nichols. (*Acacia de besson*)
ベソニアアカシヤ

等がある。

即ち(1)は從來各地に見られる刺のある種類で、(2)(3)は何れも此の変種で刺のない種類である。之等の本来の適地は緩斜地乃至平坦地の土壤の深い処で、山頂や中腹以上の急斜地、寒風の強く当る

處、表土の浅い芝地や堅密な粘土質地は不適である。他樹に比べて瘠地に耐えると云うものの、よくよく悪い土地に植える場合は客土をするか、植栽前に間作をやつて土壤を輕鬆にしたり、イタチハギを植えたり、基肥として堆肥・落葉(1本当り50~100匁位を与へたり、又は植穴に予じめ硫酸(20gr)と過磷酸石灰(40gr)とをよく土と混じて施したりする。

ニセアカシヤは薪材としては火力強く煤煙少く点火容易であり生木のまゝでも燃料に供し得る。又木炭(但、黒炭)としては収炭率大で点火し易く立消や爆跳も甚だしい。斯く薪炭材として甚だ優秀なものみならず、器具材・枕木・土台等に用いられ、蜜は良質豊富である。成長のよい処では6~7年頃から伐採可能となるが、一般には10~15年位で伐採し萌芽更新を行う。

上述の通り瘠地植栽樹として有用なものではあるが、難点の一つは刺のある事である。尤も樹が大きくなると主幹の刺は落ちて差して邪魔にならないとは云ふものの、とに角刺のある事より忌避せられ実状は今の處まだ特用樹種の範囲にある。

それで刺のない前記(2)(3)の種類が考えられる訳である。(2)の英国トゲナシニセアカシヤは灌木状で学名が示す様に傘状をなす。(3)の青島トゲナシニセアカシヤはニセアカシヤと同じ様に喬木性である。併し我国中部以南ではとに角、東北地方では此の無刺の二変種については今の処相当量の造林成績がないのでまだ何とも云えない。現在秋田支場の釜淵分場で試植しているが、之が成功すれば寒冷多雪地方での植林の可能性も高まる訳である。

尙ニセアカシヤは前記の如く甚だ勢力旺盛ではびこり易く、優良な林地や畑地に接して植えると根が其處に蔓延し養分を奪取するので斯る處に対してはすすめられないのである。また萌芽力も極めて旺盛で、之が長所でもあるが、他の方之の繁殖を抑制又は撲滅し度い場合でも仲々困難であるが、盛夏八月頃樹幹を地際近く伐ればその株は枯死するとの事である。

以上の各種ニセアカシヤ類(ロビニヤ属、多く北米原産)の外、本当のアカシヤ属(多く濠洲に原産)のものにモリシマアカシヤ・ハナアカシヤ等幾多の種類があり、我国にも輸入され、優良なタンニン資源・薪炭材・パルプ用材・観賞樹・蜜源として、倉田博士により救国樹などと喧伝されたが、東北地方に対する適樹としての確認はまだない様である。

然し濠洲のヴィクトリア洲やタスマニア島には各種アカシヤ属のものが産し、そして之等地方は南緯40°前後なので東北地方も之等のうちのあるものについては望みなきに非ずと思はれるが今後の研究にまち度い。

研究だより

NO 1~38 (昭26.3~28.12) 総目次

題 目 筆 者 No.

(所感・論説)

「研究だより」発刊によせて	宮崎 櫛	1
技術普及への希望	川田 正夫	1
創刊を祝して	柳下 鋼造	1
発刊一週年を迎へて	川田 正夫	16
「研究だより」第二年目にあたりて	宮崎 櫛	16
近代統計学の最近の動向	櫻村 大助	21
御挨拶の言葉	西村 太郎	23
漆栽培の合理化について(1).(2)	千葉 春美	24.26
ヒバ施業講習会所感	吉田藤一郎	38
土壤水分とヤマハノキ、イタチハギの根の分布について	千葉 春美	38

(調査・研究)

電気抵抗測定に依る苗畑の地下水測定	木立 正嗣	1
最近管内に発生してゐる森林害虫	木村 重義	1
新しい統計学へのしるべ(1).(2).(3)	柴 親良	1
大鰐経営区の造林対策	櫻村 大助	1.3.5
育苗に関する二、三の問題	山谷 孝一	2
ブナ林土壌の研究	宮崎 櫛	3
苗畑の井戸について	大政 正隆	5
能登地方のアテ林業	木立 正嗣	7
植え鋤のこと	山谷 孝一	7
苗畑の地力判定について	神 キヨシ	7
赤松人工林不成績の原因について	沖永 哲一	8
針葉樹下木植栽の成績	長谷川正之	9
苗畑にいくら水を撒いたらよいか	櫻村 大助	9
防火線の設定について	神 キヨシ	9
ウツ閉度とヒバ稚樹の成長	佐藤 正	10
生物季節について	白石 明	10
苗木の取扱について	木村 武松	10
「東北地方の気候」とスギ苗の植え時期	宮崎 櫛	11
播種床の苗木本数を正確に知る方法(1).(2)	神 キヨシ	11
漆の将来性	櫻村 大助	12.13
砂防植生盤について	千葉 春美	14
スギのよい苗、わるい苗	高橋 宏治	15
能登のアテ林業を一見して主として(挿木苗木について)	オキナガテツカズ	17
	吉田藤一郎	19

東北の山火事危険度	佐藤 正	19
湿潤植質土壌に於けるヒバ林の施業	山谷 孝一	20
昭和26, 27年管内に発生した森林害虫(1).(2).(3)	木村 重義	24.25
野辺地部内積沢地方のアカマツ林土壌	櫻村 大助	29
カラマツ育苗と焼土	山谷 孝一	28
標準木に対する二、三の考え	宮崎 櫛	29
「研究だより」に就いての輿論調査(その計画)	櫻村 大助	29
全 上(その結果)	〃	29
全 上(読者よりの希望意見)編集係	〃	30
浸透について	防災研究室(好摩)	30
笹生地の地持特に「クロシユーム」の施用について	櫻村 大助	31
山火事について	村上 与助	31
苗畑害虫サビヒヲウタンゾウの被害	五十嵐, 山家	
	木村(重)	32
久慈営林署管内に発生した松喰虫の被害	木村 重義	32
鶯宿地方(平石営林署管内)のヒバ	白石 〇	33
アカマツ播種造林地の施肥について	佐藤 亨	34
鯉ヶ沢地方のブナ林の萌芽	斎藤 久夫	34
ヒバ実生苗の成長促進について	巻田 源久	35

(解 説)

林業試験場青森支場の業務内容		2
標準木規格決定打合せについて	分場. C. H	3
国有林野森林土壌調査担当員現地協		
議会報告	山谷 孝一	4
一関赤松総合試験地の試験につて	長谷川正之	4
誰でもやれるアンモニヤ定量法	神 キヨシ	4
好摩分場の概要		5
漆種子の監水選について	千葉 春美	5
山火事について	佐藤 正	5
忘れられた土壌微生物	沖永 哲一	6
試験研究成果中普及に適する事項	林業試験場編	7
治山の話	奥山晋之助	8
赤松短期育成に関する試験	村井 三郎	9
日本の造林並に苗畑事業の改良に就いて(1).(2)	フロイド. M. コシツト	12.13
大畑. 増川施業実験林土壌調査概要	小野武之助抄	
瘠悪林地いろいろ(1).(2).(3)	山谷 孝一	13
	神 キヨシ	13.14
		18
八甲田山系積雪及水分調査(1).(2)	高橋 宏治	14.15

研究だより

イザリアコガネ菌施用の注意	種苗係(局造林課)14
椎茸栽培法について	高橋 正志 17
アカマツ短期育成に関する試験について	アカマツ試験係18
青森営林局管内に於ける植生調査の沿革と展望	木村 武松 21 村井 三郎
東北地方のスギ苗の規格について	宮崎 柳 22 沖永 哲一 沢藤 雅也
ボルドー液とその石灰	K子(支場) 22
戸来村村有林造林適地調査報告書	村井 三郎 23
リンクスト教授にお伴して(主として林木品種改良問題)	村井 三郎 25
新しい林分材積測定法(紹介)	樫村 大助 25
茸と私	ジ ン 25
青森営林局管内に於けるヒバ人工造林地の現況(1)。(2)	白石 明 27
寒 茸	ジンキヨシ 27
楓糖について	村井 三郎 28
土壌の養分が缺乏したとき植物が示す一般的な症状	沖永 哲一 32
中国の特殊土壌に最近どんな木を植えているか	神 キヨシ 34
黒沢尻ブナ総合試験地で樹種更改試験を開催するに当って	ブナ林係 35
男助山及矢倉山試験地のスギについて	武藤 惇 38
不良林地とニセアカシヤ(続完)	木村 武松 38

(文献紹介・抄録)

日本積雪連合会「雪と生活」	1
佐藤敬二「林木育種」上、下	3
「九州大学農学部演習林報告(第十八号)」	6
名古屋営林局「苗圃灌水設備の概要について」	6
青森営林局「宮城地方杉林林分收穫表並杉林間伐指針表」	6
芝本教授「スギ及びヒノキ苗木の成長と土壌水分に関する研究」	8
吉井義次「植物群落の観察」	9
吉良芳夫「畑地の灌漑施設について」	10
林業解説シリーズ	12
米国の森林調査について	木村 武松 12
「青森営林局管内に於て森林植生上から見た人工杉林地地位別指標植物の研究」	村井三郎抄 15
ネキリムシ駆除剤2種	17
地況林況因子表示法の一例	木村 武松 18
アデの挿木について	武藤 抄 20
「パルプ用材林の短期育成に関する	

試験について」(1)。(2).	井 沼 抄 21.22
林業試験場「林野土壤調査報告第一号」昭26.3	24
中島広吉「樹幹析解」	26
嶺一三「測樹」	26
四手井綱英「スギ苗の霜害防除法の一案」	27
芝本教授による苗圃施肥の一規準	ジ ン 抄 28

(質疑 應 答)

二年生杉苗の系統と成長	村井 三郎 4
効率の意味	T. K 5
粘土の性質等について	8
笹枯殺剤について	10
一鋤植について	ジンキヨシ 17
杉苗木植栽について	村 井 氏 20
水成岩、火成岩、凝灰岩の林木に及ぼす影響	24
砂礫土にもよく杉が成長する理由	24
スギの系統鑑定について	村井 技官 26
植栽本数について	井 沼 29
杉造林地に対する施肥について	ジンキヨシ 31
ブナ林ののこし伐作業について	樫村 大助 32
アカマツ播種造林の成績について	井 沼 33

(情 報)

試験場支場長会議の概要報告	3
第六回林業試験場研究発表会について	4
G. H. Q 林業技術顧問一行の視察をうけて	6
技術指導普及の動き青森支場及好摩分場	8
第二回特産関係林業技術普及員現地協議会に参加して	千葉 春美 11
昭和27年度恒例支場長会議の概要報告	19
ブナ丸太林内予備防腐防虫試験	(木村, 樫村)
日本学術会議東北地方区会議について	M 生 22
日本林学会東北支部大会	23
林木育種研究家連絡懇談会の開催	村井 三郎 29
支場長会議の開催	30
十和田科学博物館の紹介	村井 三郎 35

(雑 録)

森林資源の現況	24
研究だよりについての輿論調査	26